倭国と隋の外交政策

権力について

権力に制限を付けるべきではない。権力は無制限でなければならない。能力のある人間に良い仕事をさせるためには、余計な条件を付けるべきではない。そういう人間には、好きにやってもらった方がいい。

最近の傾向として、何にでも厳しい条件を付けたがる人が多い。多くの労働者を、ある一定のルールに沿って働かせるならば、たしかに仕事の質を保証することはできるかもしれない。最低限これだけの仕事はできる、ということを顧客にアピールしたい場合、そうしたやり方は有効だろう。社会的な重要性の低い仕事であれば、それでも良いのかもしれない。しかし、政治に関しては、そうしたやり方は不適当である。

民主主義や立憲主義という政治理念は、権力に制限を付けることを目的としている。それは、これこれの条件のもとで仕事をやりなさい、と、政治家に命令を出そうとするものである。

もしも、その政治家の人間性が劣悪で、放っておけば滅茶苦茶をやりかねないような人間であれば、何らかの制限を付けた方が、まともな仕事ができるようになるかもしれない。しかし、そういう人間が政治家をやっている時点で、すでにその国は終わっている。

つまり、権力に制限を付けなければ、まともな仕事ができないような政治家しかいないのであれば、どんな政治制度の下でも、ろくな結果にはならない。ゆえに、権力に制限を付けようとする、いかなる試みも無意味である。民主主義を支持する人間は、政治をなめている。そんなやり方では、まともな政治は期待できない。

民主主義がまともに機能する国家からは、すでにあらゆる倫理や道徳が失われていると言わざるをえない。そのような、終末の人間が暮らす終末の国家では、民主主義は十全に機能するだろう。たとえばアメリカのように。

いったい誰が、この世にありながら、正義を求めずにいられようか。いったい誰が、この世にありながら、不正を憎まずにいられようか。あらゆる人間は正義を求めている。我々は、他人の中に存在する、この正義の心を信じなければならない。それが道徳であり、政治の基である。

倭国と隋の外交政策

1

聖徳太子が隋の皇帝に送った国書に関しては、様々な議論があるようである。しかし、この問題は、中国と日本の二国だけの問題ではない。この時期の東アジア全域の国際関係に目を向ける必要がある。

南北朝から隋の時代にかけて、東南アジアを含むアジア諸国の間で、仏教的な形式をとった外交関係が顕著に見られる。つまり、仏教を奉じる中国の王朝と、同じく仏教に帰依する中国周辺地域の諸国家が、お互いが仏教徒であるという共通認識の下で、友好関係を深め合う、という現象が観察されるのである。

これはおそらく、双方にとって有益なことであった。なぜならば、仏教という学問が、外交の基盤となる相互理解を助けてくれたからである。一般的に言って、お互いの共通点を見つけるということが、コミュニケーションを始めるためのきっかけとなる。共通の宗教を奉じているということが、その手段として機能したわけである。その具体例については、別の研究書に譲る。

2

隋の帝室は仏教を信仰していた。そのため日本の王家は、仏教的な形式を通して、隋の帝室と接触しようとしたわけである。これは、当時の国際環境においては、普通のことであったと思われる。

聖徳太子が普通でなかったのは、隋の皇帝をやり込めたことである。彼は、隋の皇帝を菩薩天子と呼んだ。では、菩薩とは何か。菩薩とは修行者である。仏道を求めて修行する者を菩薩と呼ぶ。そして、修行者には必ず師匠がいる。つまり、菩薩とは、仏陀のもとで修業に励む者のことである。

したがって、太子が言わんとしたことは、次のようなことだったと考えられる。中国の天子も、日本の天子も、同じく仏陀を師匠としているのだから、その点では兄弟のようなものである、と。煬帝はただ無礼と言うのみで、これに言い返すことができなかった。

ここには、隋という帝国の、外交関係における弱点が現われているように思う。そもそも、平等思想を特徴とする仏教は、中国的な華夷思想と相性が悪いのである。中国皇帝が仏教を奉じる限り、皇帝を超越する権威として、仏陀の存在を認めざるをえない。それは、ある意味で自己矛盾である。その矛盾を、太子は鋭く突いた。

おそらく、隋の後に成立した唐の帝室は、その失敗をよく理解していたのだと思う。そのため、彼らは道教を国教と定め、仏教を以前ほど尊重しなくなった。権力の安定のためには、帝室から仏教を排除せざるをえなかったのである。しかし、民衆の間には、仏教への信仰が根強く残ることとなる。

3

また、聖徳太子の外交方針は、その後の日本外交の基本となったと考えられる。いまでは想像もできないが、明治時代の日本外交は非常に強気であった。

外交は強気のほうがよい。外交の場では、相手に足元を見られたら終わりなので、向こうが何も言い返せなくなるほど、やり込めたほうがよい。そういう強気の外交が、明治の日本にはあった。つまり、日本は外交が上手かったのである。むしろ上手すぎたくらいで、そのせいで色々と恨みを買ってしまった。

その反省からか、現在の日本外交は非常に弱気である。しかしながら、聖徳太子のような、相手の弱点を容赦なく抉る外交が、いま再び必要なのではないか。

4

後漢末から南北朝の時代にかけて、様々な仏典が漢訳され、仏教は中国人に受容されていった。その過程で、三論宗や浄土宗など多くの宗派が生み出された。その中で最も重要なものは、智顗によって始められた天台宗であった、と私は考えている。

これは、はっきりと証拠立てて議論することは難しいことなのだが、中国において空という観念を初めて理解し、それを漢文によって自由自在に表現してみせた人物は、智顗であったと思う。

天台宗の基礎にあるのは、中観派の学問である。智顗は龍樹の著作を綿密に研究し、空の論証を自分自身のものとした。たとえば、同時代の三論宗は、中観派のテキストを研究する学派である。しかし、同宗派の吉蔵の著作は、中観派を研究の対象としているところがある。彼は、空とは何か、ということをテキストの分析によって明らかにしようとするが、自分の言葉で空について語ることは、まだできていない。

これは、あるいは文学の問題なのかもしれない。私は、智顗は空を語っていると感じる。しかし、吉蔵は空に関して語っているだけである。この点で、私は中国仏教の頂点を智顗の中に見る。漢字によって表現される仏教は、智顗がこれを完成させ、智顗がこれを始めたのである。

5

そのように考えてゆくと、興味深いのは、隋の煬帝が、智顗によって菩薩戒を授けられていることである。隋という国家は、中国の仏教史を理解する上で、非常に重要な存在である。

その時代は、中国の仏教化のピークであるとともに、隋の滅亡によって、仏教を用いて国を治めるという理想が否定されてしまった、という点で、中国における仏教受容が曲がり角に差し掛かった時代でもあった。隋の文帝が始めた、仏教に基づく国作りは画期的なものであった。それが上手く行っていれば、中国における仏教の地位は、今とは全く違うものになっていただろう。

一方で、日本においては、奈良朝以来の政策によって、仏教による国作りは成功したように思われる。その理由は、中国では、仏教が伝搬してきた時点で、すでに儒教や道教などの高度な文化が育まれていた。しかし日本には、まだそこまで高度な文化が発生していなかったために、仏教の受容が、中国よりも深く進んだのだろう。

つまり、隋による中国の仏教化は失敗したが、大和朝廷による日本の仏教化は成功したわけである。その意味で、この二つの国家は兄弟のようなものだったのかもしれない。

ここに、中国と日本の歴史の分かれ目があったと考えるのは、穿ちすぎだろうか。日本と中国の決定的な違いは、その仏教化の程度にある、と私は考えている。

6

皇帝権力を至上のものとする中華主義と、人間の平等を説く仏教の対決は、一見、前者の勝利によって終わったかにみえる。しかし中華

主義の持つ排他性は、常に他民族の不満を招き、歴史を通して批判され続けてきた。

清朝の雍正帝による『大義覚迷録』は、その一例である。この書は、漢人の中華主義者である曾静と、満洲人の大清皇帝との間で行われた、問答の記録である。その中で雍正帝は、中国の領域に生まれた人間だけが文明的であり、中国の外に生まれた人間は全て野蛮人であるという中華主義が、いかに道理に合わないものであるか、ということを弁論によって明らかにしている。私には、雍正帝の意見は文句なく正しいものに思える。

中華は拡大する。それは、かつて黄河流域の中原のみを意味していたが、やがて長江流域や山東半島、雲南にまで広がり、清朝の時代には、満洲や東トルキスタンをも含むようになった。

だが、何が中華であるのか、ということも、同時に変化し続けている。大清皇帝が示した大中華という理想は、単なる中華主義ではなく、民族の平等に基づいた、新しい世界帝国を目指すものであった。そして、石原莞爾の提唱した「東亜連盟」という国家連合は、この大清国の理想を受け継ぐものであったと考えられる。

中華はやがて、日本をも呑み込むだろう。だが、我々はただ呑まれはしない。我々はむしろ中華を乗り越え、人類の平等を実現する契機を、そこに見出す。日本を含む新しい中華は、これまでの中華を超えた、民族の平等と人類の平和を実現するための、極大国家となるだろう。

世界平和はすぐそこまで来ている。それは必ず実現されねばならない。

南無妙法蓮華経。

大清国について

大清国は伝統的な中国王朝の一つに過ぎなかった、というのは、中華主義を宣伝しようとする中国人の屁理屈である。

たしかに、清代の中国でも科挙は行われていた。しかし、それによって役人に採用された漢人が関与できたのは、中国の政治だけであった。彼らは、大清国全体の政治に与れたわけではない。つまり、清国そのものの統治機構からは、漢人は排除されていたのである。このことから、清代の中国は満洲人の植民地に過ぎなかった、という見方が成り立つ。

中華思想の普遍性を宣伝しようとする中国人は、満洲皇帝でさえも中華主義を受け入れたのだから、中華思想の普遍性は明らかなのだ、と主張する。無論、そういう理屈も成り立つ。だが、実際に漢人を支配していたのは誰だったのか、ということはまた別の問題である。大清皇帝は、漢人を懐柔するために、彼らの思想を上手く利用したのだ、という見方も成り立つはずである。

つまり、大清皇帝は中華思想など全く信じていなかったが、中国人に対してはそう見えるように振る舞っていただけだ、という可能性もある。この場合、本当に普遍性を持っていたのは、中華思想ではなく、満洲人の統治理念だった、ということになるだろう。そうすると結局、中華思想というものは、限られた地域でのみ通用するローカルな理念にすぎないのであって、満洲人の政治理念こそが、普遍思想と呼ばれるにふさわしいものだったことになる。

だが、ここで難しいのは、満洲人自身が、彼らの思想のようなものを全く語らなかったことである。そのために、満洲人が、漢人の思想を無批判に受け入れてしまったかのような印象が生まれてしまう。さ

らに、清朝の末期になると、漢満一家の政策がすすめられ、清国の中枢にまで漢人が進出するようになる。そうなると、ますます漢人と満洲人の思想が区別できなくなってしまう。

しかしやはり、初めのうちは、満洲人と漢人の間には厳密な区別があったのだから、満洲人が、その統治の初期から漢人の思想を受け入れていたとは考えにくい。また、太平天国が掲げた「滅満興漢」のスローガンからも分かるように、清代を通して常に、漢人と満洲人は別の存在であると認識されていた。というのも、もしも、満洲人が中華思想を受け入れ、彼ら自身が漢人と同化していたのだとすれば、「滅満興漢」というスローガンは意味をなさないはずである。ゆえに、満洲人と漢人は、それぞれ別の政治理念を持つ別の民族であった、と結論できる。

満洲人が、どのような政治理念によって帝国を統治していたのか、ということを言語化することはできないかもしれない。しかし、彼らが、中華思想とは異なった理想に基づいて帝国を運営していた、と考えることはやはり可能である。その場合、大清国を単なる中華王朝の一つと考えることは、もはや適切とは言えないだろう。

現在の共産中国の統治を正当化するロジックの一つは、清朝が伝統的な中国王朝であった、という考えに基づいている。そうすると、清朝の後継国家である共産中国は、清朝の版図を受け継ぐべきである、という理屈になる。だが、その議論の前提は非常に怪しいものである。中華思想の普遍性なるものは、漢人の作り話に過ぎないのではないか。

中国は、アジアで最も普遍に乗り遅れた地域である。真の普遍は仏法以外に存在しない。

民族主義

前世紀の日中戦争に見られるような、民族主義によって戦争が過激化するという現象は、西洋文明がもたらした惨禍の一つである。中国には、もともと自民族中心主義ともいえる中華主義が存在したが、その傾向は、西洋的な民族主義の影響によってさらに過激なものとなった。

西洋人は存在にこだわる。何かが存在するという考えにこだわるあまりに、その考えの不合理に気付かない。

私の言わんとすることは、読者諸氏にはすでにお分かりだろう。民族が存在する、という考えは誤りである。その誤った考えに基づいて、それぞれの国や地域で様々な思想が組み立てられ、それにそそのかされる形で、我々は激しい争いへと駆り立てられていった。

民族は空である。民族なるものはどこにも存在しないし、民族の精神なるものも存在しない。日本人は存在しない。中国人は存在しない。満洲人は存在しない。存在するのは一人ひとりの人間であって、「日本人」などというものはどこにも存在しない。それは目にも見えないし、耳にも聞こえない。私は、ある一人の人間の声を聞いたことはあるが、日本人なるものの声は聞いたことがない。

国家とは、人間の集合である。社会とは、人間の集合である。民族とは、人間の集合である。それ以上のものではない。

我々は、日本政府がこれこれの政策を実行した、という言い方を日常的にしている。しかし、実際に仕事をしているのはそれぞれの人間であって、日本政府なるものがどこかに存在して、それが書類を書いたり、スピーチをしたりしているわけではない。日本政府とは人間の集合である。我々は、それら人間の仕事に対して、仮に「日本政府」

という主語を用いて語っているにすぎない。実際に存在しているのは個々の人間であり、国家も政府も民族も、言葉の上で語られるだけで、現実には存在しない。これを仮名(けみょう)という。

民族が空であることは、他にも様々な方法によって示すことができる。それは読者への練習問題としよう。そうした訓練を通じて、民族という観念の不合理さが実感できるようになるだろう。

最近の哲学者は固有名にこだわるが、実際には固有名も普遍名も区別はない。

名前の問題にこだわるのは論理学者の特徴である。彼らは現実を見ずに、言葉遊びに没頭する。言論の自由は、それら夢遊病者の収入を保証するための手段にすぎない。哲学者は人間社会の寄生虫である。しかし、一寸の虫にも五分の魂があると言うので、彼らにも何か使い道があるのかもしれない。

相互確証破壊

核兵器の相互確証破壊は、戦略として成り立っていない。そもそも、報復攻撃が抑止力になるという考えには何の根拠もない。もしも、死を恐れない敵がいたならば、相互確証破壊は無効である。だが、死を恐れるような軍隊は初めから敵ではない。

ここで問題となるのは、次の二点である。まず、敵国の一般市民を標的とする攻撃を行うべきかどうかということ。次に、それを行いうるとして、彼らが死を恐れていない場合、やはり相互確証破壊は無効であるということ。

第一の点に関して言えば、一般市民を標的とする攻撃は、原則として行うべきではない。それは卑怯であり、そのような作戦を実行する軍隊には、いかなる大義もありえない。

しかし、もしも、敵がそのような戦争を望んでいる場合には、それは道義的に間違いだとは言えない。敵国の軍事組織が、自国の一般市民を攻撃するか、または攻撃する意図を有していることが明らかである場合には、敵国の一般市民を攻撃の対象とすることは、無条件に非難されるべきことではない。それは、戦争の泥沼化と長期化を招くため、軍事的には誤りであるが、必ずしも道義的な非難に値するわけではない。

さて、第二の点に関して言えば、そのような国民は存在しうる。少なくとも、存在しないという保証はない。したがって、相互確証破壊は戦略として成り立っていない。

もしも、防衛大学校の生徒がこのような戦略を提案したならば、彼は落第にされるべきである。こんな戦略を本気で信じているのは、よほどの馬鹿だけであろう。

法華経

法華経は不思議なお経である。大した内容もなく、たとえ話だけが延々と続く。私が初めて読んだときには、ただ言葉の響きに圧倒されるだけで、何が書いてあるのかよく分からなかった。

しかし、しばらくするとまた読みたくなる。そうして何度も読んでいるうちに、少しずつその教えが心に染み込んでゆくのである。読む人によって、このお経から受ける印象は異なると思うが、私が法華経から受け取ったメッセージは、次のようなものだった。

ときどき、科学者とか哲学者の人が、真理は知りえないものである、と言うのを耳にすることがある。人間には真理は知りえないかもしれないが、それを探求することに意味があるのだ、といったような話である。

しかし、どうして彼は、それが知りえないものであることを知っているのだろうか。真理は知りえない、と主張する人間は、真理が何であるのかを知らないはずである。それなのに、それが知りえないものであることを、どうして彼が知っているのか。彼が真理を知らないのであれば、それが知りえないものであるかどうかも、彼には分からないはずではないか。

そうすると、真理が知りえるものである可能性も、確かに存在するわけである。さらに、それはすでに誰かによって発見されているが、自分はそれに気付いていないだけだ、という可能性もあることになる。そして、それは仏陀によってすでに発見されている。ゆえに、真理を知りたいと思うならば、仏の教えを学べばよい。

それが、私が法華経から受けた印象であった。それから私は中論の勉強を始めたのである。

真理は存在しない、あるいは、真理は知りえない、という主張には、原理的に根拠が存在しえない。ゆえに、それは無意味な主張である。一方で、真理は存在する、あるいは、真理は知りえる、という主張は、意味のある主張である。

事実と言葉

1

中国人の書く文章は信用できない。彼らには、嘘と本当の区別がついてないように見える。

日本人の場合、言葉というものは、事実を表現するためのものだという感覚がある。しかし、中国人にはそもそも、事実とそうでないものの区別がない。そのため、彼らの書くものはどこか現実離れしている。人間が文章を書いているというより、文章に書かされているような感じがある。

言葉というものは、放っておくと、言葉そのものの論理が優先されてしまって、事実からかけ離れていくという性質がある。そのため、文章を書くときは、一度立ち止まって現実を振り返るという作業が必要になる。そうしないと、筋は通っているが、現実とは何の関係もない作文が出来上がってしまいかねない。

中国人の書く文章は、大体そういうものである。それは昔の話ではなく、今も同じである。だから彼らの話を聞くときは、その点に注意しなければならない。最近の日本人は、学者であっても、中国人の言うことをナイーブに信じてしまう人が多い。困ったことだと思うが、これも日本が中国化しているということなのかもしれない。

日本人が中国人を虐殺したという話は、ぜんぶ嘘だと思ったほうがいい。彼らには、現実を語ろうという頭はない。中国人の言葉は、すべて政治的なものである。

2

一方で、事実に対する日本人の謙虚さは、特筆すべきものである。彼らは現実感覚に優れている。

大抵の日本人は、自分は普通の人間だと思っている。自分は他の人間と変わりがない、と感じている。しかし世界的に見て、それは異常なことである。一般的な中国人やアメリカ人は、自分だけは特別な存在だ、と思い込んでいる。それが普通である。

日本人は、自分自身を客観的に観察することができる、世界的に見ても稀な民族である。そのことを、もう少し自覚したほうがよい。とくに外交関係においては、それは強力な武器になるものである。

しかし、また愚痴のようになるが、最近は日本人らしからぬ日本人が増えている。中国人やアメリカ人のように、自分は特別だと思い込む人間が増えている。だが、現実にはどの人間も、人間集団の中の一つでしかない。その客観的な事実を、事実として受け止められるようになるべきである。

人間の命は掛け替えのあるものである。代わりはいくらでもきく。それが事実である。ゆえに、命を尊重するべきではない。尊重されるべきは、命ではなく知恵である。

3

子を思う母の心は利他的なものだ、という話をときどき耳にする。しかし、それはただのエゴイズムである。なぜならば、その母は、他人の子供を、自分の子供と同じように大事にするわけではないからである。自分のものだから大事にする、という態度をエゴイズムという。それは何ら尊いものではない。

大量死や大量生といった問題は、命を尊重する文化に特有のものである。命は尊重されるべきものではあるが、しかし現実には、すべての命を救うことはできない。その事実に直面したときに、命の価値を測ろうとする考えが生まれてくる。たしかに命は尊いが、そこには救われるべきものとそうでないものの違いがある、という形で、問題を処理しようとする。その意味で、大量死と大量生は、やはり表裏一体のものである。

一方で、自分の命と他人の命を平等に扱おうとする日本の文化からは、そのような問題は生まれにくい。命はすべて一時のものなので、あまりこだわっても仕方がない。そう考えるならば、生にも死にもとらわれる必要がなくなる。それが正しい文化である。

命を尊ぶという場合、念頭にあるのは自分の命であろう。自分の命にこだわるから、知恵が曇るのである。

座禅

仏法を学ぼうとするものは、必ず座禅を修めなければならない。瞑想をせずに読書だけ行っても、何の意味もない。

いわゆる仏教学者の人々は、書物を読むだけで仏法に通じたつもりになっている。片腹痛いことである。座禅に打ち込むことなしに、仏法を知ることはできない。仏教学者は須らく座禅を修めねばならない。

もちろん、それは簡単なことではないだろう。座禅を始めたときに最も困惑することは、何をすればよいか分からないことである。

座禅とは、基本的にはただ座るだけである。三十分なり一時間なり、時間を決めて座り続ける。その間、自分から動いてはいけない。それ

では何もできないように思えるが、実際には何でもできるのである。
人間とは、常に何かをしないではいられない生き物である。ただ座っているだけでも、我々の心の中では活発な運動が行われている。それがあまりにも自由なので、かえって何をすればよいか分からなくなってしまう。それが座禅の難しさだと思う。
本当は適切な師匠に教えを乞うのが一番良いのだろうが、そんな悠長なことを言ってられない場合もある。それに、最後は自分自身で工夫するしかないものでもある。私も、大乗起信論とか摂大乗論とかを参考にしながら、いろいろ工夫をしてみたが、結局、ただ座るだけでよいということに気づいた。それが正しいのかどうかは分からないが、少なからず得るところはあったと思う。
世に言う仏教学者の方々も、疑念を持たずに、まず座ってみてはどうか。

政治雑感

1

私が選挙権を得て、初めて選挙に行ったのは、ちょうど郵政選挙の頃だった。それまでの政治の流れを知っている人間には、小泉という人間は面白く見えたのかもしれない。だが、私のような有権者一年生にとっては、実に意味不明な選挙であった。
郵政改革とか、自民党をぶっ壊すとか言われても、それがどうして国民のためになるのかが分からない。そもそも、その立候補者の言う通り、自民党をぶっ壊すべきだと考えるのであれば、どうして自民党の候補に投票しなければならないのか。自民党をぶっ壊したいのなら、自民党以外の政党に投票すればよいのではないか。私はまるで、カフカの小説に迷い込んだような気分だった。
そんなときに、共産党の候補者は主張していた。「消費税を廃止するべきである」。「大企業から税金を取るべきである」。少なくとも、彼らの言葉は理解可能であった。ようやくまともな人間に出会えた、という気がした。
それ以来、私は共産党を見つづけている。必ずしも彼らに投票するわけではないが、一定の信頼感を抱いてはいる。私は、国政選挙では一度も自民党に投票したことはない。
私は、政治は国民のためにあるのだと考えている。強きを挫き、弱きを助けることが政治だと考えている。その点において、共産党は正しいと思う。もちろん、彼らの政策には賛同しかねるものも多いが、政治とは何であるか、という認識に関しては、私は彼らを完全に支持している。
インテリぶった連中からは青臭いと笑われるかもしれないが、政治はゲームではない。私は、下らないゲームに付き合うつもりはない。

2

ついでにN国に関して言えば、その主張は正しいと思う。
彼らに投票するつもりはないが、ＮＨＫへの批判は筋が通っている。そもそも、勝手に電波を流しておきながら、受信機があるなら金を払え、というＮＨＫの言い分は、まったく意味が分からない。それならスクランブル放送にしろ、というN国の主張は、十分に納得できるものである。
たとえば、我々は地方自治体に税金を納めるが、その使い道に関しては、選挙によって首長や議員を選ぶという形で、ある程度市民の意

見を反映させることができる。しかしＮＨＫは、半ば強制的に受信料を徴収しておきながら、そういった民主的な手続きを全く欠いている。それは、現代社会の通念に反するだろう。少なくとも、ＮＨＫの社長を選挙で決めるとか、あるいは初めから税金で運営するとか、そういった改革が必要なのではないか。

そもそも、どうして国会でＮＨＫの予算を審議しているのかが分からない。我々は、一私企業の予算を審議させるために、国会議員を選んでいるわけではない。いったいＮＨＫは何のために存在しているのか。それが公共のためなのであれば、なぜ公費で運営しないのか。Ｎ国はもっと突っ込んだ議論をするべきだろう。

最近は、水道や電力などを、民間の事業者に任せる事例が増えている。そうなると、民主主義が本当に必要なのか、政治というものがどうあるべきなのか、分からなくなってくる。誰か答えを知っている人はいないのだろうか。

天誅

1

嘘つきが引き起こした問題を、話し合いで解決することはできない。こちらがどれだけ真面目に話をしても、相手が平気で嘘をつくのであれば、いくら話し合いを続けても時間の無駄である。

そうした問題を解決するためには、話し合い以外の手段に訴えなければならない。むろん、直接的でない方法で問題を処理できるのであれば、それが一番よいが、他に方法がない場合には仕方がない。

私が念頭に置いているのは、政治の問題である。政治家が嘘をつく場合、尋常の方法ではどうにもならないこともある。ゆえに、政治の場から、暴力の可能性を排除してはならない。それは、政治を不健全なものにするだろう。

人の命が何よりも重い、などということがあるだろうか。もしも、一国の宰相が平気で嘘をつくならば、彼の命は羽毛よりも軽いと理解するべきである。

2

ここに起き上がり小法師がある。それをみんなで小突き回し、引きずり回して、なかなか倒れないなどとやっているが、そういうおもちゃなのだから仕方がない。

そんなくだらないものは、さっさと捨ててしまえばよいのだが、どうしても捨ててはいけないのだと皆が言う。まったく訳が分からない。